

大地

華 け
長 まん
草 そう

新井市小出雲 入 村 芳 江

№ 12
1983. 3. 1
真宗大谷派
浄国寺 (23)5724

昭和五十八年一月五日午前一時
静かな夜更けである。娘が買って
きた穂積隆信著「積木くずし」を
一気に読み終え、著者夫婦と一人
娘の非行との凄しいばかりの闘い
の記録に、深い感動を覚える。何
でもありすぎる時代に、いじり過
ぎずに子供を育てる難しさがある
のだからかと、あらためて戦後の
不自由な時代を余り深く不自由と
も思わずに過してこられたことを
しみじみ懐しむ。

日当りを好むもの、半日陰を好む
もの、殆んど日陰でも良いものと
それぞれ適所でいきいきとして
自ら生きる。人間は生きる為に環
境に合わせようと我慢もし、時に
はそのためにストレスがたまっ
て異常もおきたりするが、それはそ
れなりに智慧で解決していくが、
植物は気に入らない場所では生き
てゆけなくて次の年に芽が出て花
が咲いて、と期待しても、たい
ていは裏切られる。此の頃、山歩
きして見事な山百合など見つけ
ている。さわやかな風のわたる半
日陰のしかもじめつかない大地に
ゆったりと花開く様を見ると、心
の洗われる思いがするから、自動
車のひんばんに通る道筋の玄関脇
などに植えてあるのを見る時、可
愛想で

折らずに置いてきた

山陰の小百合

賤が見つけたら

手を出すだろ……と

私 けの好きな花の一つ、けまん草
の装飾 けのケマンに見立てたという
花の有様が好きで、特に大切にし

ている多年草だが、これに似てい
る同じ「けし科」の野草でムラサ
キケマン(やぶけまん)がある。
こちらの方は私の草むしりの敵で
雑草の強さで見事な実をつけ、さ
わると「ほうせん花」の実のよう
にパンとはじきかえす嫌な草でも
ある。

でもどんな嫌な雑草でも、折々に
小さな美しい花をつけ、拡大鏡で
見ると又一だんと鮮やかに美しく
しばし草むしりの苦勞を忘れさせ
てくれる。

今は冬、雪の下で眠っている花々
を又春からは見守って大切に育て
たいと思う。

註

入村芳江氏は新井市小出雲、入村哲
治氏夫人。矢代村志村の旧家田中様か
ら御縁あって嫁がれた。お若い時は、
お年を召した御両親によく仕えられ、
御両親も又本当に頼りにして居られた。
柔和で、何事も暖かく包み込んで
しまわれるような広い心を持っていら
っしゃる。お話していても豊富な知識
から出る話は、人をひきつけるに十分
である。昭和四十四年、住職の結婚式
の時は心に浸み入る様な暖かいお祝
辞を戴き、今でも耳底に残っている。
お子様方も成人された今は、広いお
屋敷に御夫婦だけの静かな生活でお
られる。

父の思い出

新井市国賀鏡村 一昭

初めて「大地」に接したのは、もう何年前になるでしょう。生活に追われて、立ち止まって考え、みる心のゆとりの無かった私には、一服の清涼剤のようにすがすがしいものと思えました。残念乍ら今でも生活態度はあまり変わりありませんが、以来毎号楽しみに拝見させていたでいております。昨年、父の十七回忌を務めました折、酒間に御住職にそんな感想など申し上げたところ、何か書いてくれないかというお話で、気軽にお返事申し上げて、今になって困っております。

親に口答えした言葉のはずみで、水風呂に入らなければならぬはめになつてしまいました。きかん気のわんぱく坊主だった私は、いきなり真裸になって水の中に飛びこんでしまいました。そんな暑くはない時期だったと思うのですが、父はその時、何も言わずに火を燃してくれたのです。

私は冷たい水の中で、父が板きを折る音を聞き乍ら、子供心に何かとても悪い事をしたな、という思いで一杯でした。今になってみると一生懸命思い出そうとしても、意外と思ひ出は少くないのですが、このことは私の心に鮮明に残っていて不思議です。

父が六十才の若さで亡くなって早や十七年、あの頃の自分と同じ位の子供を持つ身になって、子供達に鮮烈な思い出を残せる父でありたい、そして父の分まで母に孝行しなければと、今年ほど思う年もありません。

註

鏡村一昭氏は新井市国賀の人。若くしてお父様を亡くされ、随分御苦労なされた方である。高田工業高校電気科を卒業され信越化学に勤務された後、通信大学に入学しておられる。新しい知識を求め学習し入として成長する。素行らしさを常に求め続けておられる。小柄な身体にフアイト満々、お会いしているのと、とても励まされる。

日記から

山崎 武雄

十月二十二日 終日雨 風強し 朝の検温も三六四、午后も三六六と平熱。タンも出ず、何だか楽になった気分。午前の廻診は、中村部長、香西主任看護婦ともども発声について、そろそろ心配して下さる。有難けれど小生は未だその点無関心。退院した後、落ちついて考えたいと思う。

午前、午后を通じて、暇を見ては「安曇野」三巻を読む。テムポ早くなりやゝ急ぎ過ぎ、個人への掘り下げ足りず。

十月二十六日 快晴続く

朝、前夜来床の中で汗をかき寝苦しかった。検温三六八。少し熱い。身体をふきとって貰う。午前中久し振りに点滴。昼までかかる。午后、床の中で早慶戦をきく。四対二で慶応弱いと言われ乍らも勝つ。夕方小便に行き寒い風に当り気持悪し。便所と部屋で吐き気を催し少し戻す。じっとしていても汗ばむ。検温は三六、二。高くないのだが不思議。今日は最賢寺の結婚式。その時間々に式の様子などいろいろ想像し独りぼゝえむ。

白髪のみ
ふえていつしか
古稀の春

滴翠

この句は、甲状腺ガンに蝕まれて一昨年の春みまかった父が、亡くなる年の賀状に書く挨拶のため詠んだ句である。
最初、この句は「しらがのみ、ふえていつしか」と平仮名で書かれ、家人に示されたのだが、どういう訳か、夫も母も、そして私も「しがらみの、ふえていつしか……」とよんでしまい、落胆したり、苦笑したりした父が、やむなく漢字の表記に換えた、といういきさつがある。よみ手である父は、あくまでも「しらがのみ」を固執したが、時を経た今でも私は密かに「しがらみの」でも又良いのではないか、と思い続けている。人は年を重ねながら、知らず知らずのうちにしがらみを増やし、そのしがらみにしがらみを、あるいはせき止められながら生きて行く。ただ、しがらみを単に枷だと思いかそれともかすがいのように思いかで、人生は、まるっきり違うものになるのだから。そういう意味で父は、私の中には少しばかりあ

る、人生に対する虚無的な考えや消極的な態度を、一貫して嫌った人だったので、しがらみの……とうたわねばならぬ必然性など、どこにも無かったのだから。

父の俳号「滴翠」は唐招提寺（である）と記憶しているのだが、句碑に刻まれた芭蕉の句

若葉して
御目のしづく
ぬぐはばや

に感動してつけたのだと話しても

父と俳句

山崎 慎子

らったことがあったが、素敵な号を持っていた割には、残された句はそう多くはない。

歴史や文学への造詣のかなり深かった父は、人一倍記憶力も優れていた。その文章や会話の中に、先人の残した和歌や俳句を引用することが実に多かったし、又その引用はとて当を得ていて、父の話は、より理解する助けともなった。父が、母や私はそんな父によく「ご自分でも、もっと作んなされば良いのに」と言っていたものであ

る。今になれば、何と不遜なことを言ったものかと思うが、そんなことを言う裏には、「他人の物の引用ばかりしてはいないで」という一種の非難めいた気持ちもなくはなかったことが、尚更恥ずかしい。鑑真和尚への思いを句に託した芭蕉と、その句の本当の意味を、心の深い所でとらえ得たからこそ、句碑の前に佇みながら、父は感動したのだし、その感動から「滴翠」という俳号を頂いたことを考えれば、たとえ自身は寡作であったとしても、先人の歌や句に、安心して自分の心を託していたにちがいない。強いて「己」ばかりを主張しなくとも、他人の心を我が心と受け留め得るやわらかな心の世界が父にはあったから、上手な引用ができたのだろうと今は思う。

数少ない父の俳句の中で、次の二句は、折に触れて思い出す、私の好きなき句である。

裸木の
独尊みごと
雪晴るる

堂前に
萩のこぼれ葉
昼静か

信州からの手紙

長野市三輪 菱谷 潤 吉

拜啓 今般亡母の葬儀に際し、遠路御足労をお願い申し上げ、御蔭様にて滞りなく葬儀を了へる事が出来まして厚く御礼申し上げます。生前中は大変御世話様に相成り又、立派な法名を賜り重ねて厚く御礼申し上げます。

母は元来、非常に達者で私共以上で御座いましたが、一昨年八月より右手右足が不自由となり、床の上で本や新聞、テレビを毎日の楽しみと致して居りましたが、便所へも人手を借りることなく、廊下のカーテンの開閉を自分の仕事と致し、足取りも確かなものでした。ただ入浴だけは危険ですので、私達二人掛りでやって居りました。頭の方も全然変らず、食欲も充分あり、こんなに早く逝ってしまうとは考へもつきませんでした。十二月中旬頃より急変、どっと寝つく事になり、食欲も急になくなり、二十七日夕刻、逝くなつた次第です。

寝ついたので、本人としても家内として

も思い残すことがないことと存じます。

最期は私共二人に見守られて、本当に静かに逝きまして私共と致しましても子供の責務を果す事が出来たものと喜んでおります。年末御多忙の折にて、皆様には大変御忙しい目におあわせ致し、申し訳ありませんでしたが御蔭様に後仕末の方も八分通り片付き、娘も四日には帰ります。それから二人だけの生活になります。ポッカリ穴のあいた様な気持ち、味はふ事と存じます。今後は二人で一日々を大切に有意義な日を送りたいと考へて居ります。

本当に大変御世話様になりました。寒くなりまして御住職様始め、皆様呉々も御自愛下されたく御健勝の程御祈り申し上げて居ります。先は右乱筆ながら御礼まで申し上げます。

敬具

② この手紙は、菱谷氏のお母様が亡くなられ、お葬式をつとめたすぐ後に届けられたお礼状。あれこれ紹介の必要がない程、菱谷氏の考えや人となりが出てくる手紙であると思う。氏の諒解のもと、原文のまま転載させて頂いた。

あとがき

※予定を大幅に遅れての発行となつてしまひ、待っていて下さつた方々、とりわけ御多忙の中を、快く御寄稿下さつた入村様、饒村様には、お詫びの仕様もございませんと。紙面をお借りして、深くお詫びと御礼を申し上げます。

※五貫野に大蔵さんという木地師さんがいらっしゃいます。縁あっておつきあいさせて頂くようになって十年近くになります。樽を扱う大蔵さんは無理な量産をすることなく、作品の求め手とのふれあいを大切になさいます。ちよつと職人氣質でこわい方かなと最初の頃は思いましたが、大変温かい誠実なお人柄です。亡くなつた父もぬくもりの伝わる樽のお盆や器をとてても大事にして、お茶をのみながらそれらの品々を根気よく磨くの最期まで続けておりました。

「大地」に原稿をお寄せ下さる方に、何の御礼もできないことを、ずっと心苦しく思い続けておりましたが、今度大蔵さんにお願ひして「揚枝差」を作つて頂きました。「大地」寄稿の記念にお使い頂きたいと思ひます。

(慎)